

# 「からだところ」COL 研究会のご案内

昨年採択された本学の教養教育の取り組み「特色ある大学教育視点プログラム (COL)」の開発プロジェクトの一つとして本年2年目になります「からだところ」COL 研究会は、今年も続きます。分野の壁を越えてからだところをつないでゆきたいと思います。

つきましては、下記の要領で第6回研究会を開催します。どうぞ奮ってご参加下さい。

## 第6回研究会

### 「身体・イメージ・生命・わたし」

講師：北川東子教授（超域文化）、跡見順子教授（スポーツ・身体運動）

日時：7月1日（金） 午後6時00分～8時00分

場所：情報教育棟4階会議室

唯一見えない自分の顔、さらにみえない自分のからだの論理、自分がわかるようにしくまれてはいない。それゆえ哲学する必然性（北川東子）、科学技術で理解する必然性（跡見順子）がある。

北川：「人は自分の身体をどのようにイメージし、どのように自覚するのか」という問題について考えてみたい。

心と身体を結び問題のひとつとして、「身体イメージ」の問題がある。身体教育の基礎に、身体イメージの問題があるのではないだろうか。

当たり前のことだが、「自分の身体」は自分にはちゃんと見えない。見えるのは、せいぜい手足と腹部、そして鼻の先くらいである。「自分の身体」は、鏡に映したり、人に教えてもらったり、数値で確認したりしなくてはならない。つまり、間接的にしか知覚できない。したがって、「自分の身体」ほど、さまざまなイメージが交錯する場もない。健康や運動機能など能力・機能についてのイメージや、ジェンダーなど社会意識によるイメージ、そして審美観や道徳観に制約されたイメージが複雑に絡み合う場である。今回の研究会では、具体的な身体イメージの根底にどのような基本的問題が潜んでいるかを考えてみたい。

- ・ 身体イメージの二重性と脱中心性（プレスナーの理論をもとに）
- ・ 身体イメージと「死と誕生」

跡見：「生命として、人間としての自分を識る身体「運動」科学」

私たちのグループは皆、身体を知っていると思っていたと思うのだが、それは生理学ではみずからの意志で運動をつくりだす筋を随意筋と命名しているの、随意とは自分で制御できる、と勘違いしていたとはと気づいた。昨年来、「自分を知る」プログラムは進化の過程で組まれてこなかったという確信に変わり、本年1月22日の第5回研究会で小林康夫先生に「その通り」と言われ、やっと身体運動科学の地平（よってたつ哲学的基盤）を得たように感じている。この感覚は、昔吉川弘先生が工学の原点を求めた時と同じような感覚ではないだろうか。遅すぎるということはないと信じ、生命の躍動を知識や細胞の動的イメージから得、様々な運動を行っているときの「理」をもとめてしまうところの面白さを共感してもらおう場としてスポーツ・サイエンスコースが位置付いている。「生物のシステムをもっていながらそれらを知るプログラムをもっていない」ということにより、それなら工学と同じように「科学として知る」ことが必要であると言えると論理的に言える。身体を動かしながら科学するという教育の現場を共有した学生達とのコミュニケーションにより5年間で自らの理解もふかまった。運動する身体と知識の有用性、共創を紹介したい。

「からだところ」COL プロジェクト世話人：八田秀雄・村越隆之



東京大学大学院総合文化研究科・教養学部  
教養教育開発室  
101号館2階、内線4-4247  
<http://www.komed.c.u-tokyo.ac.jp>